



山本有三研究：通俗小説の構成（2022年度修士論文要旨）

張，蔡粵緣

(Citation)

國文論叢別冊, 1:116-117

(Issue Date)

2023-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100483224>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483224>



山本有三研究

——通俗小説の構成——

張 蔡粵縁

本論文は山本有三の長篇小説を論ずる。第一章は、山本が戯曲家から小説家へと転身する境目となった時期に創作された『波』（東京大阪朝日新聞）一九二八・七・二〇（一・二二）を対象としている。本作における登場人物の「対立」関係が意味するもの、教育上の「メデイシンボール」の発想、戯曲との関わりなどについて考察した。第二章から第五章は、その姉妹作と言われる『女の一生』（朝日新聞）一九三一・一〇（一九三三・六を対象とし、両作品の通俗小説としての個性について検討した。本作に関してはとくに筋立てにおける「偶然」の要素に着目し、昭和初期における偶然性論と関係について考察を行なった。さらに、一九二〇年代以来定着した通俗小説と女性読者との関わり合いを論じた前田愛『近代読者の誕生』等を踏まえつつ、山本の長篇の通俗小説としての性格について検討した。

第一章『波』論では、戯曲から小説への転換期に創作された『波』をめぐって分析を行った。山本は文学活動を開始した直後から『闘争』はドラマだと主張していた。小説家に転向した山本が書いた小説には、その戯曲的な特徴が残っていることが確認できる。本章では、『波』に認められる戯曲的性格に着目し、作中で描き出された人物間の対立がどのような意味を持つかについて検討

した。とくに注目されるのは、主人公行介の足の病に関する叙述が作中に繰り返し現れてくる点である。さらに『波』は、行介の人生の道を探る過程を描写した小説であり、「私が歩いて来た方向は決して誤つてはゐない」という考えが『波』の行介にも射影されていると考えられる。

作品の後半部「父」の物語は、行介と夫人との、進的教育方針をめぐる対立にもとづいて展開されている。行介はメデイシンボールという遊戯から、子どもは誰かのものではなく、「学校」「人類」「社会」のもののだという思想を得る。行介の足の病は、このメデイシンボール思想に至った後に治り始める。父としての苦悩からメデイシンボール思想に達するまでの経緯が、『波』という作品の展開の下地をなす。ここに窺われるのは、山本が、精神と意識という内面的な成長を重要視していたということである。

続いては、『波』との関係性に注目しつつ、その姉妹作と言われる『女の一生』について検討した。第二章『女の一生』における偶然性の問題では、本作がかなり大胆に「偶然性」を取り込んだ作品であることに注目する。このような場面は時として、あまりにも出来過ぎに見える。だが、同時代の文学でも、ご都合主義的な偶然性は「通俗小説」の条件として捉えられており、のちに横光利一「純粹小説論」（改造）一九三五年四月）でも問題視されている。したがってここでは、作中の再会の場面に注目し、『女の一生』における「偶然性」がどのような意味を持つか、また山本が「偶然性」をどのように捉えていたかについて考察を行った。山本は現実性のある小説を書く一方で、偶然性をも現実性を構成する重要な要素の一つとして捉えていた。『女の一生』には、偶然

性を通俗小説の条件として肯定的に受け止めようとする姿勢が見られる。

このような『女の一生』における「偶然性」の問題を考察する上で必要となるのは、同時代に提起された、横光利一の「純粹小説論」と、それが触発した偶然論である。本論はそれらの同時代言説や真銅正宏の研究『偶然の日本文学』を踏まえ、本作における「偶然性」のあり方について考察を行った。山本と横光は、『偶然』に対して共通した認識を持っており、「偶然」を具体的に「再会」「遭遇」という小説の構成要素として捉えている。通俗小説の偶然性を全般的に受け入れているところに、本作の特質を窺うことができる。

ヒロイン允子の成長に応じて、『女の一生』は異なる三つの女性像を提示する。小説の前半部はヒロイン允子の結婚、妊娠及び墮胎、女性の職業などの問題をめぐって展開され、中盤は主に主人公夫婦の息子允男の教育方針をめぐる問題が取り上げられる。また、後半では、左翼思想に染まった允男が作品の中心に据えられる。本論文はこのように、恋愛小説（前半）、家庭小説（中盤）、社会小説（後半）という三つのジャンルを組み合わせた長篇通俗小説として本作を捉え直した。

第三章『女の一生』前半部の考察——恋愛小説の諸問題——では、主人公允子の人物像、小説の背景となる時代においての女医に対する受容状況、家庭教育理念を問題視として考察を行った。旧式の見合い結婚を拒否し、医業という職を身につける允子が「新しい女」であること、つまり『青鞥』に代表される当時の恋愛観・結婚観を共有していることを明らかにした。

第四章『女の一生』中後半部の考察——家庭小説から社会小説へ——では、允子と公荘の結婚後の生活を中心として展開されている『女の一生』の中盤を考察する。女医の誕生、歴史に関する資料を参考し、小説の背景となる時代においての女医の実相を確かめた。女医は理想な儲けがある職業とされるが、現実には、それほど経済的に裕福ではなかったようである。そのことは小説にも現れている。医療制度の不備ゆえに、不法墮胎、誤診など医療事故が起こり、允子を窮境に陥らせる。女医、私立病院、医療事故などのモチーフは、山本有三の社会事情の問題点に対する強い関心を表現していると言える。次に、小説中に現れる教育理念と大正期の自由主義との関連性について考察した。

終章では、今後の課題を提起している。息子允男はハイネの急進的思想に共鳴する学生である。早川正信は、作品に引用されたハイネの詩の翻訳は高橋健二訳を参考したものであると指摘している。高橋は山本の全集月報にも文章を寄稿しており、東大独文科の後輩として山本と繋がりをもっていた。允男のハイネ受容を考察するうえで示唆的なのは、同じく東大独文科出身の中野重治『ハイネの橋』である。後半部では、允男は学生運動に参加するようになる。学生運動については、概ね息子を心配する母親としての允子の視点から描かれている。

作品中、政治的な叙述を回避したところには、当時のプロレタリア文学においての官憲の弾圧を回避する山本の姿勢が窺えよう。文学上の政治的制限を踏まえつつ、社会小説としての性格を備えた本作後半部を考察することを、今後の課題としたい。

（ちよう さいえつえん）